

令和4年度 壮年会会長 退任のご挨拶



コロナ禍により十分な活動はできませんでしたが、「壮年会だより」発行、壮年会法座、清掃活動など、ご住職のご指導と担当者のご尽力により、継承できましたことはよかったです。ご協力有難うございました。

会員の皆さまの今後のご活躍を願いつつ、退任させていただきます。

(盛田 好一 記)

令和5年度 壮年会会長 挨拶



会長をお引き受けするにあたって

今回、壮年会長を仰せつかり、高齢の非力を省みずお引き受けしてしまいました。

私にとって中原寺は他力本願との出会いの縁であり、亡き両親を思い起こすところでもあり、大いに幸せに思っています。

一方で、このところの長引くコロナ禍やウクライナ・ロシア騒動、さらには多発する大災害などで悲惨な状況を見聞きして心が痛み、他力で我のみが救われるので良いのかとの思いが募ります。

その折に、昨年の中原寺文化講演会での中島岳志師の「利他と他力」のお話に光明をいただきました。それを機に親鸞の教えの中にそれを求めて歎異抄の解説書などを読み返しましたがなかなか、見いだせずいました。

しかし先日、親鸞聖人ご誕生850年、浄土真宗立教開宗800年の京都本願寺法要に参加するご縁を得て、親鸞聖人直筆の「教行信証」を拝見し、また時を同じく

て本願寺より発刊された『親鸞聖人のことば-「教行信証」御自釈を読む-』を読みました。

そこには二種の回向(往相回向・還相回向)、それを通しての「利他と他力」の考え方が明確に示されてきました。またそこには様々な出会いがあり、自分一人ではなく他人とともに生きることの大切さがわかりやすく説かれていて心に響きました。

これらのことが中原寺の縁で得られたことに鑑み、壮年会の意味合いを以下のように思っています。

- ①お寺(関連)に行く(来る)機会を多くする。
- ②聴聞や行事を通して多くのいろいろな出会いを得て、そこから互いの思いに至り、生きる力に気づいていく。

少子高齢化の進む中、時代は大きく変化し、必ずしも安泰ではないかもしれませんが、阿弥陀仏の本願を信心し、明るくやってみましょう。

(太田 清史 記)

令和4年12月の行事報告 December 壮年会法座「御文章を味わう解説5回目報告」



12月の壮年会に参加して思ったこと「吉崎建立章」(一帖第八通) 令和4年12月11日(日)午後3時

ご住職が蓮如上人の御文章「吉崎建立章」について解説され、その後NHKのドキュメント番組を拝聴しました。

太平洋戦争時における仏教界の戦争への関わりを題材にしてまとめられていました。

おりしもロシアによるウクライナ侵略問題、政府内では防衛費増額も検討されている中での視聴でした。大声で反戦と言えない時代に、見方によっては戦争に僧侶が協力したというように受け取られることもあるかもしれません。

しかし、わたしは「寝ても覚めても命のあらん限り称名念仏をとなえ、必ず阿弥陀如来は救う」という浄土真宗の教えの慈悲で協力したのではないかと思うのです。

戦争という状況の中で宗教にできる唯一のことは、人々の心の救いになることです。

救うために軍部に協力したのではないかと思うのです。少しでも、ほんの一瞬でも心安らかに死んでいった若者も少なからずいたのではないかとも思っています。

先日、軽井沢の美術館で鑑賞したフランス画家の藤田嗣治の戦争画を思い出しました。

どういう気持ちで戦争画を書いたのかは定かではありませんが、藤田も従軍絵師としての責任を非難され、戦後日本を出国して以来、生涯日本の地を踏むことはありませんでした。

当時の時代背景を考えると、軍部が宗教も芸術も利用して必死に戦ったのもうなずけます。

私は戦争の爪痕がまだ少し残っている昭和25年に生まれ、高度成長期とバブルを体験し、楽しく戦争のない平和な人生を歩ませていただいています。私の父は海軍少年航空隊に志願して、飛行機乗りとして開戦から終戦まで南方で戦っての生き残りです。

とても辛い思い出のようで、戦争の詳しい話は最後まで聞くことはできませんでした。これからの人々に戦禍のないことを願うばかりです。 合掌

(鈴木 純一 記)

感話
シリーズ-35

「春季彼岸会法要に参詣して」

「宿縁廟法要・彼岸会法要」 令和5年3月21日(火) 春分の日 午後1時



3月21日、1時から宿縁廟法要、1時30分から彼岸会法要でした。好天にも恵まれ、また新型コロナウイルスに関する行動制限が緩和されたこともあって、久しぶりに以前の賑わいを取り戻し盛況でした。

法話のご講師は、明治学院大学名誉教授で宗教学者の阿満利磨先生。中原寺にはこれまで何度もご来駕いただいたお馴染みの先生です。この日の法話は、「浄土に往生する」は信じられますか、との問い掛けから始まりました。

西方十万億土の遙か彼方にある仏の楽園に往生するという経験し得ない現実離れた事は、現代人には信じ難いと思う人も少なくないと思います。法然上人も「浄土の蓮の台に乗るまでは、不安な気持ちでなくなることはない」といわれたそうです。

そこで先生は、「信じる」ではなく「納得する」と考えたら良いと言われました。「信じる」とは信じる対象を正しく見極めるという重々しさがあります。これに対し「納得する」の語感、受け入れてゆだねる気楽さがあるように思えます。

五劫もの気の遠くなるような時間(先生によりますと1劫は43億2500万年だそうです)を費やして打ち立てられた大慈大悲の本願をあれこれと見極めようとせず、有難く受け入れてゆだねること、本願が自分に必要だと納得する。

そして阿弥陀さまのはたらきによって信心(まことのこころ)をいただく、それが「本願を信じる」ことになる。お寺に行って聴聞を重ねるのは、その「道理」に納得するためだと仰いました。

次に6字の称名念仏。阿弥陀如来は名号となり、そのお名前を称えること(念仏)は全ての人に可能であり、我々に与えられた行と考えるべき、とのことでした。

日常の行として口称することは、本願を信じ(納得し)身をゆだねる心を持つことにつながります。法然上人を師と仰ぐ親鸞聖人は「教行信証」で、善導大師の生まれかわりといわれる元照の言葉を引かれ、「阿弥陀如来は念仏となられ、念仏する人にもみ存在する」と示されました。

以上、浄土門の基本をわかりやすく説明くださった阿満先生は、今年84才になられるとのことでした。背筋を真っ直ぐに若々しい声での丁寧なご法話で、良い時間を過ごさせていただきました。

有り難うございました。 合掌

(平 邦雄 記)



ワンポイント解説

安心とは?

仏教信仰により、心が安らぎを得、動ずることのない境地を指す。浄土教では、一般的に阿弥陀仏の救いを信じて往生を願う心のことをいうが、宗派により微妙に解釈が異なる。この安心の要旨に反する説を立てたり曲解する者を異案心者とよぶが、浄土真宗ではとくに安心を重んずる為、多くの異案心問題が発生している。(参考:「学研/浄土の本」)